JISS

The Japan Institute of Scandinavian Studies

スウェーデン社会研究会報

No. 312
1999/12

発行所　社団法人スウェーデン社会研究所　〒105-0013 東京都港区浜松町1-8-1（株）科学新聞社内5階　TEL03（5776）1835／FAX03（5776）1836
発行人　松元さぎり　編集責任者　岡沢憲芙　デザイン　ワンバイワンステイション　印刷所　東友印刷　定価400円（年間購読料4千円）
1999年11月25日発行　No. 312

Photo 中嶋千絵（dill com）

分権社会/新たな時代における自治体像を求めて／視察／スタビック社と日本／Events in STOCKHOLM 1999～2000／Japan Calendar（在日スウェーデン大使館より）／文佳、18歳。スウェーデンで学ぶ／瑞典的日常／当研究所理事松前紀男氏に仏芸術文化勲章オフィシェ授与／書籍・映画紹介／インフォメーション

Aiming to the new possibility of the city's exchange between Sweden and Japan in the time of the decentralization

分権社会／新たな時代における自治体像を求めて

川崎市総合企画局都市政策部　スウェーデン社会研究所研究員
伊藤　和良　Mr.Kazuyosi Ito

99年5月、いつもどおり、重い荷物を背負って、ヨーテボリ駅前に立つ。吹き抜けていく風とともに、たくさんの思い出が私をつつむ。何の知識もなく不安で、ただ思いだけは熱い20代の私が、40代の私を迎える。

川崎市職員として、1983年に海外派遣第一期生に選ばれ、スウェーデン・ヨーテボリ市を訪問してから、16年間、私はスウェーデンとの交流を、静かに、だが、絶えることなく続けてきた。

ビルギット・スクーグ市議会議員。
川崎市議会議場にて

◆外国紹介のいびつさ

何が私をこれほどまでに魅きつけて来たのだろう。それは、スウェーデンの持つ革新性、政治的実験の大胆さと、日本とは違った意味での「市民生活の豊かさ」である。そして、もう1つ付け加えるなら、これは、実験国家スウェーデンという評価と裏腹なのだが、日本でのスウェーデン紹介があまりに光に満ち溢れ、自治体現場にいる私にとって、手の届かない存在に思えたからにほかならない。

スウェーデン研究を続けてきた立場からは、それは、このうえもなく光栄な面でもあるのだが、川崎市の職員である私に引き移せば、『スウェーデンではこうなのに、なぜ川崎市ではできないのか』、市民からのそういった質問や批判としてはねかえってくる。

いくつかの誤解がそこにあるように思う。施策はそれ自体、単体で存在するものではない。その国の持つ歴史や文化、政治的背景が複雑にからみあう。もし、それを日本の風土に根づかせようとするなら、そこには、両者をつなぐ中位概念と知恵、新たな施策が必要となる。特に自治体施策を組み立てるにあたっては、施策間の連携、総合性が大きなポイントとなる。

いくつかの誤解、それは、スウェーデン紹介だけではないのだろう。『外国の自治体ではこうだ』という指摘は、専門領域に踏み込めば踏み込むほど、本来もつ総合性を失っていく。都市のありのままの姿や、自治体職員の苦悩や困惑といったもの、それとはほど遠い、理想的な都市がそこに現出してしまう。これは、学問自体があまりに細分化してしまい、総合的な視点を失ってしまったこととも関連する。少なくとも、外国の文献を紹介するだけで、日本の後進性を指摘し批評できる時代はもう過ぎてしまった。そう思う。

◆新たな時代に向けた具体的な道筋の提示

自治体職員に求められるものは具体的な事案の解決であり、現時点の法枠組みの中でどれだけ努力できるか、あくまで、1歩ずつ、それは終わることのない具体的な事業の連なりでもある。

スウェーデンを1つの理想像として提示するのであれば、それをどう日本の中で実現するか、自治体レベルで何ができるのか、いま求められるのは日本という現実の中での具体的な道筋の提示だと思う。川崎市では、不十分ながらもスウェーデンをはじめとした欧米諸国から様々なものを学び、川崎という地でそれらを実現すべく努力をしてきた。それは、「オンブズマン制度」の導入であり、会議公開を含む「統合的情報公開制度」の定立、法が動かない中での外国人の市政への参加方策の確立（「外国人市民代表者会議」）、そして、自治省のいう「当然の法理」と向きあう中での「職員採用時における国籍条項の撤廃」等である。いままた、こども、高齢者、女性など、人権救済を含む新たな時代にふさわしいオンブズマン像（仮称・統合的オンブズマン）を求め、篠原一東大名誉教授を中心とした研究会が続けられている。

◆分権時代の都市間交流～新たな展開に向けて

分権時代の都市間交流は、今とは大きく違うものになっていく。自治体職員は堂々と海外の自治体職員と向き合い、課題を共有していく必要がある。スウェーデンの自治体職員、彼らの持つ苦悩や困惑をともに考え、どうしたらそれがスウェーデンの地で実現できるかを検討する。もしそれが理想的なものであれば、税制も制度体系も全く違うことを踏まえたうえで、日本の自治体現場でどう具体化できるか、そのことを考える。同じ目線、同じまなざしで政策課題に近づく。そして、相手の懐の中に限りなく飛び込んでいく。それは自分たちの苦悩や困惑の投影でもある。

今年度だけでも、既に3人のスウェーデン人が川崎市を御訪問されている。スウェーデン南部の都市、クリスチャンスタッドシティのビルギット・スクーグ市議会議員、ヨーテボリ市の都市計画課長・ハンスアンデル氏、ルレオ大学院情報工学科のアーサ・ホルム氏である。日本の政治状況とスウェーデンの政治状況の比較、都市計画に関する問題

大きな変動の中にある日本の中小企業を語る大学院生アーサ・ホルム氏。
川崎市いさご会館にて

状況の違い、日本の中小企業政策の探究など、その問題関心、研究対象は幅広い。分権時代の交流の姿、友好から政策交流へと新たな展開が期待されている。

参考資料

Göeborgs Slad 「Improving Living Environments through Comprehensive Local Policy in Gothenburg」1995年
スヴェンティーベィ編・外山義訳「スウェーデンの住環境計画」鹿島出版会　1996年

＊いま、「月刊自治研」という雑誌で、私が交流してきた「ヨーテボリ市」の施策を6回にわたり紹介している。「新たな時代における自治体像」と題し、1回あたり1万字程度で、分権、福祉、まちづくり等、川崎市との比較を試みながら総合的な視点でスウェーデンの自治体紹介を行うものである。こちらも御笑覧願えれば幸いである。

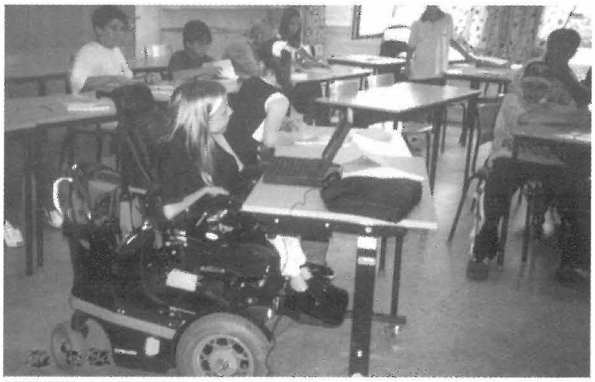
Inspection to Sweden

視　察

マルメ大学総合病院小児・青年ハビリテーリングセンター作業療法士
Occupational Therapist
河本　佳子　Ms. Yoshiko Komoto

夏から秋にかけてスウェーデンの医療福祉を見学に来る人がたくさんいます。昨年、一時仕事で帰国した時に福祉の専門家と名乗る人達が、これからの日本はスウェーデンよりもドイツの方に視線が傾くかもしれないと言っていたのに、その気配は見えません。福祉先進国というスウェーデンの存在は未だに根強いと思うし、まだまだ日本の社会が見習わなければならない事が山程あると思います。

私は作業療法士としてマルメ大学総合病院のハビリテーリングセンターで働いているのですが、時々上司の方から頼まれてバス一台の日本からの視察団や、友人を通じて視察にいらっしゃる日本人を迎えて、通訳したり職場や学校を案内する事があります。障害児と普通児との統合教育をしている学校、特別学校での特殊学級や訓練学級など回っていると、皆さんはスウェーデンの医療福祉の良さに胸を打たれて帰られます。重複障害児ひとりひとりにアシスタントヘルパーが付き、普通に学校で授業を受けている、そして私達ハビリテーリングセンターの専門職は学校まで出張サービスをしてケアをしているというその姿に驚くそうです。彼等によると日本では学校教育、養護教育、○○施設、病院となるとそれぞれの行政部門が違うために横のつながりは全くないそうです。そして、スウェーデンの障害児が受けている全面的援助がとてもうらやましいと言われます。スウェーデンに視察に来られる方達は、すでにスウェーデンの医療福祉に関する本を読んだり、資料を集めたりしてかなり勉強している人達が多いのですが、その彼等が現状を見て唸るほど何もかも素晴らしいそうです。そんな感嘆の声を聞きながらいつも湧くのが、なぜスウェーデンにできて日本ではできないのだろうか、という疑問です。



普通学級での授業風景

それは日本での学校側の受け入れ態勢が全然違うからでしょうとある視察者が言いました。日本で障害児が普通学校へ行きたいと権利を主張して、そしてもし学校側が受け入れたとしても、障害を考慮していないので普通児に全てにおいて付いていかなければならなくなるから、本人にとっては逆に苦痛になるのではないかという事でした。

そう言われれば、日本の私の実家の近くに片側麻痺の子供がいて知能は全く普通の子供と変わらなかったのですが、小学校へ上がる時に学校側は最初のうち受け入れを断ってきたそうです。それでもという両親の強い要望に応えて、最終的に両親のどちらかあるいは誰かが一緒に学校へ来て面倒をみるならばと入学を許可してくれたそうです。それから母親は生まれたばかりの乳飲み子を抱えて毎日学校へ通っているわけです。彼女の努力は並大抵のものではありません。我が子を普通の学校へやりたいと願えばそれだけ

の責任が全部自分に跳ね返ってくるのです。これにはまた頭の固い日本の学校の難しさを思い知らされました。このような例は残念ながら掘り出せば幾らでも出てきます。

スウェーデンの学校教育は日本の学校教育とは根本的に違います。

22名ほどの小人数の生徒に教員が1人から2人はいます。知的あるいは身体的障害者がインテグレート（統合）されているクラスならば教員は特別教育教員、保母、アシスタントヘルパーなど数人いる所もあります。クラス一つ覗いてみても、各クラスの机や本箱の配置がそれぞれ異なっています。グループワークがし易いように四つずつに分けていたり、机を片隅に置いて床を広くしていたり、机を円形においたり、それぞれのクラス担任が自分の仕事がやり易いように配置換えしているのです。

また、ある学校では縦割りの教育を実践して小学校一年生から三年生までの年齢混合方式をとっているところもあれば、従来の横割りのところもあります。天気の良い日には担任の独断で野外授業に変わることもあります。授業内容は一律でなく、それぞれの能力にあった課題をそれぞれが個別にしていき、早く計算の出来る子は算数の本も早く進む、早く文字が読める子は難しい本になるという風に。それに小学校は成績表もないので遅れている子も別に恥じることなく自分の発達テンポに合わせて勉強していけます。

授業風景をよくみる機会に恵まれるのですが、今国語をしていたかと思えばすぐにお絵かきになっていたり、算数になっていたりと一区切りの時間内にもバリエーションが多いのです。子供の集中力が続かないのを無理矢理押さえつけるのではなく、床の上に座らせて授業に関連のあるゲームをさせたり、グループワークで席をかえさせたりと適度に身体を動かす事を取り入れています。みるからにのんびりとした余裕のある授業風景なのです。こんな風に個々に合わせた柔軟性のある学校教育という背景があるので、教師にしても自分の個性を生かせるし、仕事はもちろんやり易いし、ひとりの障害児を受け入れるのにもなんらの抵抗も無く受け入れられるのです。

障害児が地元の学校へ通いたいと言えば、スウェーデンの学校はそのための受け入れ態勢を整えなければなりません。学校の教師は教育学にはたけていますが障害児の持つ病気の知識はありません。だから学校側は医療の専門であるハビリテーリングセンターとの連携プレイを望むのです。障害児がスムーズに日常生活が営めるように学校側はアシスタントヘルパーを雇い、環境を改善し、必要に応じて訪問するハビリテーリングセンターのスタッフと協力しあうのです。医療スタッフは別に運動機能だけを目的に学校へくるのではありません。言語療法士や、心理士なども教員やアシスタントに指導や相談に来るのです。

教員と医療スタッフとが一つになって初めて充実した教育が障害児に与えられるといえます。

これは非常に自然で簡単な事ですが、なぜ日本ではできないのでしょうか？ある人は財政がないといいます。本当にそうでしょうか？財政はあるのですが、流れる所がちがっているのではないでしょうか。厚生省と文部省との管轄が違うのでできないともいわれます。行政の境界線を越えた柔軟な態度で障害者のための施策を実行することは本当に不可能なのでしょうか。法律には厚生省と文部省とが互いに助けあってはいけないと書いてあるのでしょうか。

誰かどこかでこのような助け合いを積極的に取り入れていく許容力の大きな人達はいないのでしょうか。ますますいろいろと考えさせられます。

視察に来る人々が少しでもスウェーデンの実態を見て日本の多くの人に語れば、続々と改革の先駆者が現れて日本の障害児教育も少しは良くなるかもしれません。またそうなるように心から願っています。

スウェーデンの原子力研究開発機関

スタズビック社と日本

（株）スタズビック・ジャパン代表取締役　Representative Director
山崎　俊雄　Mr. Toshio Yamazaki

今日の原子力発電の大勢を占める商用軽水炉発電技術（注1）は米国によって開発されましたが、米国以外でのこの発電技術を自力開発した国があり、その国はスウェーデンであったということをご存知ですか。実際、スウェーデンの原子力発電所の技術レベルの高さや放射性廃棄物管理システムの完成度の高さも先進諸国の中では際立っています。その一例としては、1993年スウェーデンのフォーシュマルク沸騰水型発電所（3基）が、運転稼働率や安全レベルの高さと職員の被曝線量の低さが評価されて米国誌より「1993年世界発電所賞」を受賞したことが挙げられます。

当社の親会社のスタズビック社（Studsvik AB）の前身はAB Atomenergi社と呼ばれ、スウェーデンの原子力開発を推進すべく1947年半官半民の体制でストックホルムに設立されました。1955年に現在の地Studsvik（ストックホルムから南約100kmにあるバルト海に面した風光明媚な村）に移りました。スタズビック社は、1960年までは、各種研究用原子炉に

よる研究の他に、地域熱併給用重水炉（注2）などの設計・建設・運転も手がけました。1969年には、商用軽水炉設計部門等を新設の民間会社であるアセアトム社（現ABB－ATOM AB）に移管し、100%国立の研究所となり、原子力発電の安全性レベル向上のための試験・研究開発などを活発に行い現在に至っています。(現在は民営化されています)

日本に対するスタズビック社の最初の仕事は1972年から始まりました。スタズビック社は材料照射試験炉R2ほかを使用した原子燃料の安全性試験をはじめとし、原子炉、材料水化学、放射線検出器、廃棄物処理などの分野において、日本の電力会社、原子力メーカー各社等からも高い評価を得ています。スウェーデンが高い技術力を有する国であることはよく知られたところですが、原子力分野においても例外ではありません。日本とスウェーデンの原子力技術開発研究の仕事を通して、個々の技術者のレベルの違いと言うよりも、国や組織ひいては社会制度・文化などの違いによって生じる（と思われる）差異の大きさを感じることがよくあります。

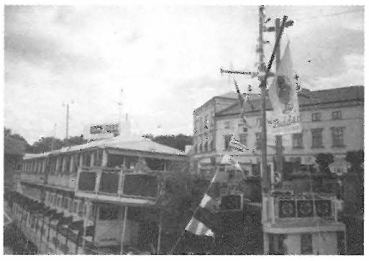
来るべき新世紀に向かって、スタズビック社はさらなる国際化を進行中で、往来の日本（当社）や米国のグループ会社に加えて、EUをターゲットに据えた戦略として、ノルウェー、ドイツ、イギリス等の国々の原子力関連会社をスタズビックグループに迎えています。さらに、スタズビック社は放射線医療の分野にも進出を始め、スウェーデンの放射線医学研究機関と共に、ヨーロッパに比較的多いとされる脳腫瘍の中性子治療施設をスタズビックサイトに現在建設中で、西暦2000年には実際の治療を開始する計画でいます。

さらにスタズビックグループの活動をより詳しくお知りになりたい方はインターネットwww.studsvik.seをご覧下さい。

（注1）軽水炉：普通に言う水（H2O）を利用した原子炉のこと。後述の重水炉は、水（H2O）の中に微量に含まれる重水（D2O）を利用した原水炉のこと。水の比重を1とすれば重水の比重は約1.10で、通常重水は水の電気分解によって得られる。
（注2）地域熱併給用重水炉：オーゲスタ炉と呼ばれ、ストックホルム校外の地下に建設され、発電と共に廃熱を利用した温水を主として暖房用に周辺地域に供給することを目的とした原水炉。出力8万kw。1964年～1974年まで運転。

Events in STOCKHOLM 1999~2000

1999年12月～2000年1月　ストックホルムの行事



Nobel Day〈ノーベル賞授賞式〉（12月10日）
ストックホルムコンサートホールにて。スウェーデン国王カール16世グスタフよりノーベル賞の授与、ストックホルム市庁舎にて、ノーベル賞受賞者およびゲストの夕食会。

Lucia Day〈ルシア祭〉（12月13日）
ストックホルム各所においてルシア祭行進およびコンサート。開催地はスカンセン、グローブアリーナ、市内教会など。

Celebrating the turn of the millennium
〈西暦2000年を祝う祝典〉（12月31日）
ユールゴーデンのスカンセンにて。

The party of the century〈世紀の祭典〉（12月31日）
世界中のアーティスト、ダンス、飲み物、食べ物。カルチャーセンターにてゲームなど。

STOCKHOLM 2000
〈ストックホルム2000〉（12月27日～2000年1月6日）
ストックホルムのウィンターフェスティバルそして大規模なニューイヤーズパーティー。1週間に及ぶ大フェスティバル。

●詳細は下記まで
STOCKHOLM INFORMATION SERVICE
ストックホルム インフォメーション サービス
Sweden House, Hamngatan27 P.O.Box7542
SE103 93 Stockholm, Sweden
Tel: +46 8 789 2400　Fax: +46 8 789 2450
E-mail: info@stoinfo.se　Home Page: www.stoinfo.se

Japan Calendar 1999

在日スウェーデン大使館 Japan Calendar 1999年11月号より
カイ・レイニウス報道参事官

北欧語シンポジウム（12月2～3日）
メーラルダーレン大学が、スウェーデン文化交流協会、スウェーデン語・文化普及協会、スウェーデン大使館との協力で、スウェーデン語をはじめとする北欧語に関するシンポジウムを開催する。詳細は、大使館広報部（野瀬）、またはMr.Goran　Huss Ghs@mdh.seまで。

SWEAのクリスマスバザー（12月11日）
毎年人気のSWEAのクリスマスバザーで、スウェーデンの伝統的なクリスマスの雰囲気、料理、デコレーション、くじ引き、そしてルシアの儀式が楽しめる。ルシアは、12時、1時、2時の3回にわたって行われる。
時間：11:00～16:00
場所：大使館展示ホールオーディトリアム

＊ジャパン・カレンダー送付をEメールでも開始します。ご希望の方は、メールタイトルをJapan Calendarとして、お名前と送付先アドレスをswedinfo@twics.comまでメールでご連絡下さい。

音楽の授業にて

My home town SWEDEN

文佳、18歳。スウェーデンで学ぶ

小林　文佳　Ms. Fumika Kobayashi

「スウェーデン」と聞くと、今でも胸がドキドキします。小さい頃からの夢がついに昨年実現したのです。私はASSEの高校交換留学プログラムの一員として、スウェーデン南部のルンドという街で、一年間の高校生活を送ることになりました。ASSEは1930年代、スウェーデンの文部省管轄非営利法人として発足、現在は世界25カ国の青少年の相互交流を実施する世界有数の規模を持つ国際教育交流団体です。私の滞在した街、ルンドは、スウェーデン南部の中心地であるマルメの北東約20キロ、教会の強大な勢力のもとに栄えた街で、現代では、長い伝統を誇るルンド大学があり、緑が多く活気あふれた学園都市です。私は、そんな街の中心にあるSpykenという、生徒数約900人の高校の3年生に在籍していました。

スウェーデンの学校は、国やコミューン（地方自治体）が運営していて、義務教育から大学まですべて無料です。給食・交通費などの費用も国が面倒をみてくれるので、全ての子供が平等に教育が受けられるようになっています。スウェーデンの福祉が発達していることは有名なことですが、驚いたことに、スウェーデンの福祉は私たちに身近な「学校生活」というところまで行き届いているのです。学校の中には、けがをした生徒や足が不自由な生徒のためのエレベーターがあったり、トイレやカフェテリアにも車椅子の人たちが利用しやすいような工夫がこらされていたりもします。

スウェーデンの高校は、「自分にあった職業をみつけ、経済的にも、社会的にも自立した人間になること」を大きな目標にしています。一年生から生徒の進路に合わせたカリキュラムに従って勉強するのです。中学・高校在学中にいろいろな職場で数週間にわたる体験実習をすることもできます。日本の高校で、進学というものを目指した勉強に追われ、余裕のない生活を送っていた私には、それがとても新鮮でした。日本ではやっと最近になって大学生のインターンシップが普及し始めたばかりだというのに、スウェーデンでは早い時期から、実習を通して、自分が何に興味があり、また、何に向いているのかということを明確にすることができます。このような制度が何十年も前から整っているのはまたしても驚きです。卒業後の進路の幅が広がり、彼らは自分に納得のいく人生を選択していきます。高校に設置されている主なコースは、芸術コース、文系・理系コース、ビジネスコース、建築コースなどです。私は、言葉の問題、そして小さい頃からピアノを習っていたということもあって、芸術コースで音楽を学ぶことになりました。日本の高校で理系コースにいた私は、音楽の道に進もうという意志を持って暮らしたことなどなかったので、どのようなクラスなのだろうかと好奇心にかられながら、不安でもありました。しかし、クラスが始まるとその不安はたちまち消えてしまいました。自分で目的意識を持って選んでこのコースに入ってきた生徒達は、さすがに「音楽」に対して強い情熱を持ち、プロを目指して真剣に取り組むのでした。そして、いいかげんな気持ちでクラスに入った私までもが、いつの間にか音楽のとりこになっていたのです。

授業の中では、教師が一方的に生徒に語りかけるのではなく、各々与えられた課題について生徒自らが調べ、皆の前で発表したり、自ら手を挙げ意見を述べることが求められます。自分の意見に責任を持って表現することでやっと個々の存在が認められるのです。

ある日のこと、音楽のままならぬ留学生の私にも、皆と同じ課題が与えられました。それは、与えられた曲を自分なりにアレンジして、リズムをつけるというものでした。当時、リズム打ちが大の苦手だった私は、友達に助けられながらも、「ここでやめては自分に負けてしまう！それに、私のアレンジした曲をみんなに聞かせねば！」と泣き泣きがんばりました。夜遅くになってやり遂げたときには、二人飛び上がって喜んだことを今でもよく覚えています。私も、クラスメートに聴音のコツを教えてあげたりして、音楽を通して生まれた友情は、ますます深まっていきました。

7ヶ月くらい経つと、スウェーデン語が分るようになり、自分の意見も少しずつ言えるようになっていきました。私と友達との間に意見の衝突が生じるようになったのもその頃です。ほとんどのことは、すぐに解決しましたが、一度だけ、大喧嘩に発展していったことがありました。日本生まれの私としては、「謝ろう」と思う反面、「ここはスウェーデンだから腹をわって話し合うべきではないか」という二つの思いに揺れ動きました。彼女の方も、相手が日本人だということで、初めはとまどっていたようですが、結局最終的には二人で徹底的に話し合いました。喧嘩という出来事は決して良かったとは言えませんが、自分の思いを包み隠さず相手に伝えることが、スウェーデンの社会でいかに大切かということを、身をもって知ることができて良かったと思います。

私から見たスウェーデン人は、多くのものを所有するより、美しい大自然の中でどのように生きるかという、「人生の質」を大切に考えています。本音と建て前を使い分けたり、お世辞を言ったりしないようです。そして、お互いの権利や自由を尊重して、干渉しすぎない関係をつくります。何より自分の人生と家族を大切にしています。

泣いたり笑ったりのスウェーデンでの一年間に、私は、ここに書ききれないほどの多くの体験をし、ひとまわりも

ふたまわりも大きくなることができたような気がします。私のことを理解し、サポートし続けてくれた日本とスウェーデンの家族、そしてこの一年に出会った全ての人々に本当に感謝しています。

私の憧れだったスウェーデンが、今や家族や友人たちとの思い出の詰まった心の故郷となったのです。

もう一度ぜひ行きたい国、それはスウェーデン！！

What a wonderful Swedish life!

瑞典的日常

Viebäcksfolkhögskola Art Course
熊谷　深雪　Ms. Miyuki Kumagai

学校の近くの森に熊がでたそうである。

ここはスモーランドの真中だが、北のほうから熊たちがブラブラと南下してきていまだウロウロしているらしい。

スモーランドの森はスウェーデンの中でも特に“森の密度”が濃く、モミも松も白樺もズッシリと根のはった美しくたくましい木々ばかりで、キノコや木の実などの森の恵みをたっぷり提供してくれる。熊たちもここが気に入ってしまったのかもしれない。

森の恵みはもちろん私たち人間にもおすそわけしていただける。秋の味覚の王者はなんといってもキノコ。とりわけカンタレールという種類は人々から一番美味なゆえ一番愛されている。カンタレールは森の精気をその小さな体一杯に詰め込んでつくられている。つみたてであれば、ビロードのような手触りから、

馨しい森の香りも食べる前から楽しむことができる。残念ながら私は素人なので自分でキノコを摘むことはできない(間違って毒キノコでも食べてしまっては笑い話にもならない)。それでもカンタレールの誘惑には抗えず、今年はスーパーマーケットで購入した100g 8.2クローナのカンタレールで秋の到来をささやかに祝うことにした。

こういう事は一人でやってもつまらないので同じ学校に通うホルフェさん一家のアパートを訪ね、ビニール袋に入ったスーパーマーケットのカンタレールをみせると、ホルフェさんは大変気の毒がって今から自分が森の中に行って生のカンタレールを摘んでくるという。こんな素晴らしい森に住んでいるのに(学校も寮も文字通りの森の中にある)、スーパーのキノコとはこれいかに、というのである。彼は小雨の降る中一人で森の中へと入っていった。待つことしばし。でも彼は帰ってこない。更に時間が過ぎた。やっぱりまだ帰ってこない。

“学校の近くに熊がでた”という言葉が私の頭の中をチラチラしはじめた。「まさか」と思いながらも、私のためにわざわざ森の中へ入っていき、危険な目にでもあったとしたら、奥さんと子供たちに申し訳が立たない。

とっぷりと日の暮れた頃、ホルフェさんがやっと帰ってきた。「今年は雨が少なくて全然キノコが生えていないんだよ」。ホルフェさんの手の中にはたった今採ってきたばかりのカンタレールがほんのぽっちり収まっていた。

電気の灯りの下でも、それはキラキラと黄金色に輝いて見えた。(99年9月中頃)

当研究所理事 松前紀男氏に 仏芸術文化勲章オフィシエ授与

松前紀男氏

札幌コンサートホール・キタラの松前紀男館長が、音楽を通じて日仏文化交流に貢献したとして、フランス政府から芸術文化勲章オフィシエ章を受け、10月11日に同ホールで、フランス大使館のクリスチャン・モリュー文化参事官から授与された。

松前氏は道東海大学長、東海大学長などを歴任する一方、フランスの作曲家クープランをはじめとする音楽史を研究。

松前氏は「音楽を愛する市民やスタッフあっての受章。今後も他国との相互交流を通じて、創造的な活動をしていきたい」と話していた。

◆フランス芸術・文化勲章とは

1957年に当時の文化大臣アンドレ・マルローにより制定された勲章。フランス文化勲章ともいう。フランス国内あるいは世界で芸術・文化の創作活動において優れた事業をあげた人物、または同分野の発展に著しく貢献した人物に与えられ、日本においてはフランス文化を積極的に紹介した人物、あるいはその実務に積極的に係わった人物、またはスポンサーとしてフランス文化を積極的に支援した人物がその対象となる。芸術・文化分野における最高の勲章とされる。

Books and Movie

Movie

「ロッタちゃんはじめてのおつかい」

2000年お正月第2弾恵比寿ガーデンシネマにて上演。

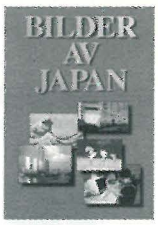
ロッタちゃんは「長くつ下のピッピ」で有名なスウェーデンの国民的童話作家アストリッド・リンドグレーンが生んだもう1人のスーパーヒロインです。美しく、穏やかな街ヴィンメルビーを舞台に、見る人すべてを幸せな気分にしてくれます。

Books

【1】「Excellent SWEDEN CARING VOL.2」

発行:スウェーデン大使館
販売:(株)紀伊国屋書店
Tel:03-3439-0128
定価1,500円(会員の方々には事務局にて割引価格でご購入頂けます。)
A4版・オールカラー、本文184頁

スウェーデンを知れば日本の未来が見えてくる。環境、福祉、子ども、シンプルライフ。



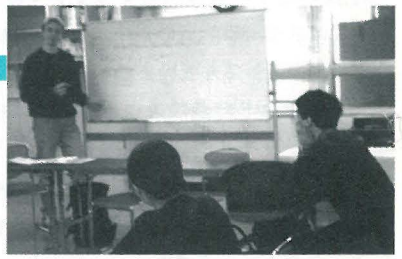
【2】BILDER AV JAPAN(スウェーデン語版日本紹介誌)

発行:アーバン・コネクションズ
Tel:03-5467-4721
定価750円(税込)
A4版・オールカラー、本文40頁

豊富な写真と簡潔な文章で、国土産業、文化、スポーツ等の項目別に現代日本を紹介。語学教材、日本理解の資料として最適。

*ここで紹介している書籍は、会員の方々には事務局にて割引価格にてご購入頂けます。

JISS INFORMATION



講習会 第100回スウェーデン語講習会

当研究所がスウェーデン語講座を開講したのは1967年。今回で100回目を迎えます。初級から上級までのアットホームで充実したグループレッスンです。
期間:2000年1月25日(火)~7月1日(土)
入会金:5,000円(新規受講者のみ)
受講料:各コース65,000円
テキスト代:別途必要となります。
定員:各15名(5名より催行。定員になり次第締切ります。)
申込締切:1月17日(月) 電話、ファックスまたはEメールにてお申込み下さい。

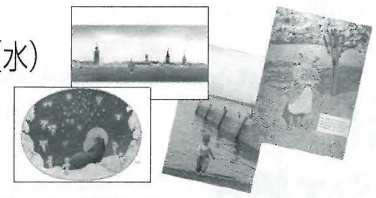
◆スウェーデン語初級Ⅰ(木曜日)
19:00~20:30/1月27日~6月22日
スウェーデン語は初めてという方の入門レベルです。物事の基本的な描写、質問をしたり、答えたりすることができます。
講師:速水望(東海大学北欧文学科非常勤講師)

◆スウェーデン語初級Ⅱ(火曜日)
19:00~20:30/1月25日~6月27日
スウェーデン語の初歩的な方のレベルです。基本的な言葉を理解し使うことができます。
講師:速水望(東海大学北欧文学科非常勤講師)

◆スウェーデン語中級(土曜日)
13:30~15:00/1月29日~7月1日
スウェーデン語を半年以上学んだ方のレベルです。会話に慣れ会話に必要な言語関連の知識を身につけるにつれ、単語、文法、表現の範囲を実践的に広げていきます。
講師:Sofia Kobayashi

◆スウェーデン語上級(土曜日)
11:00~12:30/1月29日~7月1日
スウェーデン語で日常的な事柄や課題についてコミュニケーションできるレベルです。語彙や表現力を養い、発展させたり議論したりすることができます。
講師:Sofia Kobayashi
*講師は事情により変更することがあります。また、定員の都合により開講できない場合がありますのでご了承下さい。

SALE 12月1日(水)~29日(水)

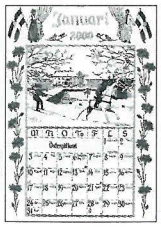


「書籍在庫処分セール」
当事務局イベントルーム
10:30~17:30(水、日、祝日休)

この機会にぜひスウェーデン関連の書籍をお求め下さい。在庫に限りがありますのでお早めにご注文下さい。(郵送代別にて発送も承ります)また在庫リストをご希望の方は80円切手同封にてご請求下さい。

◆ポストカード(¥150)、クリスマスカード(10枚入、¥350)・シール(20枚入、¥200)スウェーデンより直輸入
ジョン・バウワー、深井節子さんはじめポストカード等を多数販売しています。

予約受付 「2000年度カレンダー予約受付」



スウェーデン・レクサンドにあるSverigealmanackan社より直輸入のカレンダーを販売しております。
A3サイズ(30×42cm)壁掛け¥2,500、A6サイズ(10×15cm)卓上¥1,500 郵送代別にて発送も承ります。

The Japan Institute of Scandinavian Studies
JISS
(社)スウェーデン社会研究所 事務局(松元・Matsumoto)
〒105-0013 東京都港区浜松町1-8-1(株)科学新聞社内5F
C/O Kagakushinbunsha, 1-8-1 Hamamatsucho, Minato-ku, Tokyo105-0013 Japan
TEL:03-5776-1835 FAX:03-5776-1836 E-mail:jiss99@tkg.att.ne.jp
URL http://www.sci-news.co.jp/sweden/
月曜日~土曜日(水、日、祭日休)10:30~17:30 Mon to Sat(Wed,Sun,Holiday close)

冬期休暇

12月30日(木)~2000年1月5日(水)まで事務局は冬期休暇となります。

スウェーデン社会研究会報 平成11年11月25日発行 第10号 通算312号 行人 松元さぎり 編集責任者 岡沢憲芙 発行所 社団法人スウェーデン社会研究所 定価四〇〇円